



富士レークホテル

「日本一の富士の麓 誰もが幸せになれるユニバーサルリゾート」。富士山を望む河口湖畔にある富士レークホテル（山梨県富士河口湖町船津1）が掲げるモットーだ。障害者や高齢者向け施設の充実のみならず、きめ細かい食事の提供や、希望すればヘルパーの手配まで引き受ける。国内でも有数のバリアフリー化、ユニバーサルデザイン化が進んだホテルとして、随所に工夫が見られる同ホテルを訪ねた。

【賀川智子】

バリアフリー 最前線 ⑨

窓の外に河口湖の景色が広がる同ホテルの「レークビュー一貸切風呂」。脱衣所から浴槽までまったく段差がなく、浴槽にはリフトを備える。河口湖温泉の湯を引いた浴槽には4、5人の入浴が可能で、車いす利用者が座ったままの姿勢で、家族とともに温泉につかることができる。

リフトの操作は同行者が行うことが基本だが、事前に予約すれば介護業者のヘルパーに来てもらうことも可能だ。

利用者からは「10年ぶりに湯船につかれた」「孫と一緒に温泉を楽しめた」などの声が寄せられているという。

ユニバーサルルームには、全客室の3割に当たる23室。畳に座れない障害者や高齢者に配慮して、畳のスペースを掘りこたつ風にした部屋。電動のリクライニングベッドや、座ったままシャワーを浴びられるいすを備えた部屋もある。

さらに食事にも配慮する。別途料金が必要だが、要望に応じて通常の料理を一口大に切ったり、さらに細かく刻んだりする。固形食が食べられない人には、ミキサーで流動食化して提供する。

1932（昭和7）年創業の老舗の同ホテルを、「誰にでも優しいホテル」にしようとして取り組んだのは、創業者から数えて3代目となる井出泰濟社長（51）。94年、勤めていた保険会社を辞めて家業を継いだ。

生き残り策を考えていたところ、偶然参加した山梨県主催の講演会で「これからは福祉の時代になる」との話を聞いた。その場で講演会の講師にバリアフリー化の助言を依頼。翌年、館内に最初のユニバーサルルームを誕生させた。

定着までには多くの壁があった。当時の客は団体客が中心で、販売は大手の旅行業者頼み。「理念は分かるが、販売できない」と難色を示された。「刻み食」の提供には、和食の料理長から「板前の芸術作品を刻むなんて、とんでもない」と反対された。

だが、社会の高齢化などで、バリアフリーやユニバーサルデザインの認知度が上がる中、同ホテルの取り組みは注目を集め、少しずつ客足は伸びてきたという。

リフトで入浴 温泉満喫



座ったまま入浴できるリフト付きの貸し切り風呂。窓の外には河口湖が広がる—山梨県富士河口湖町の富士レークホテルで



ユニバーサルルームの一室。畳に直接座れない人のために、畳部分が掘りこたつ風の構造になっている同ホテルで

取り組みを始めて今年で17年。「試行錯誤の末、ようやく形になってきた」と井出社長。段差がなく使いやすいユニバーサルルームは、乳幼児連れの家族や荷物の多い外国人客にも好評だという。2011年には、工夫を凝らした設備や料理など、人に優しいユニバーサルデザインホテルの実現に尽力したとして、内閣府のバリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰優良賞も受賞した。

井出社長は「施設を改修しなくとも備品があれば対応できる。何より旅館側の受け入れたいこうという気持ちが大切」と強調し、「ホテル業界全体の『心のバリアフリー化』を進めていくお手伝いもしていきたい」と話している。